

「対話と実行」座談会（H20.11.27(木) 香南市）の概要

知事あいさつ

高知県の財政（平成20年度）のパンフレット、「学ぶ力を育み心に寄りそう緊急プラン」及び「産業振興計画 中間取りまとめ」（以下のURL参照）を基に説明。

(<http://www.pref.kochi.jp/~zaisei/joukyou/pamphlet/H20zaisei.pdf>

<http://www.kochinet.ed.jp/kinnyuupurangaiyou.pdf>

<http://www.pref.kochi.jp/~seisui/keikaku/cstori.pdf>)

座談会

【おいしいものを食べに来ていただく観光】

Aさん：香南市吉川町で養鰻場を営んでいるAといいます。全国的にも高知県はシラスウナギの採捕量がかなり多らしく、県の海洋部の指導の下、平成8年から一元集荷をしている。養鰻場だけでは、食べられない時期があったので、ウナギ専門の蒲焼き店もやっていて、今日、ゴルフのカシオワールドオープンをやっているが、そこでも販売している。また、平成12年から、旧吉川村で直販所をやっている。平成12年7月に開店して、77日間で総額2,200万円くらい売った。来場者は19,700名くらいである。旧吉川村の人口は約2,000人で、かなりの費用対効果があったと思う。そのときの会員数は確か25名だったと思うが、今現在は88名で、主に吉川町の人々が会員になって販売している。普通、直販所といえば農産物であるが、港もあるので、水産物も入れて販売した。営業日は毎週土日だけで、年間100日前後である。売上げは、13年度は4,500万、14年度に4,800万、15年度5,300万、16年度に6,000万、17年度に6,300万で、その後手狭になったので、合併前に移転して、18年度には7,200万になった。もうこれ以上増えないだろうと思っていたが、19年度は7,290万だった。市場の運営に携わる者として、何かを発信しないといけないのではないかと考えているが、今日話したかったのは、高知県は全国で第2位と言われるおいしいものがあるということで、お客さんに高知に来ていただき、高知じゃないと食べられないおいしいものを提供するようにしたらよいのではないかとということである。インターネットでたくさんの量が売れるわけではないと思う。今日、カシオワールドオープンで、私どもはウナギ弁当もちりめん丼も売った。ちりめん丼に使うちりめんじゃこは、何日も経ったものではなくて、釜揚げにして熱を冷ましただけのもので、1週間もたないようなものである。また、生のドロメ汁というものも売っている。「ドロメ汁ってどんなものですか」と聞かれたら、「これはここに来ないと食べられない」と話している。知事は外に売り出すとおっしゃったが、私は、うまいものを食べるために高知に来させないといけないのではないかと考えていた。観光に来て、観光地を見て、文化を知って、だけではなく、おいしいものを食べてという言葉も欲しかったなと思っている。本当は私はウナギ屋だけで生活していきたいが、それだけでは食べられない。漁師さんの話も後から出ると思うが、漁師さんも昨今厳しい状況である。私どもの直販所では、漁師が釣ってきた魚に漁師が値段を付けて、手数料を引いた額が1か月後には漁師の口座に振り込まれるようになっている。現金収入が増えたということで、漁師にも喜んでもらっている。また、雇用の創出ということもあって、加工部は平均年齢65歳以上で、70歳以上の人もいる。その人が昔から持っているお寿司の味つけなどで

人気があるので、元気なお年寄りに働いてもらっていて、多少の収入になっていると思う。アルバイトはほとんど高校生あるいは大学生で、仕事では品物の紹介もしないといけないが、「とりあえず笑顔でいこう」、「お客さんに話もしていこう」と言っている。隣のおばあさんが来たら気さくに声をかけるなど、ふれあい、お接待といったことにつながっている。学生には、目に見えない教育になっていると思う。例を挙げると、学生さんにお昼にまかない食を食べさせたところ、お箸の持ち方が非常におかしくて、「結婚するときに笑われるよ」と言って、1か月くらい経って治ったということもある。長い話になったが、高知に美味しいものを食べに来ていただくと、人も増えてくるのではないかと思います。

知事：売上げが4,500万円から、7,290万円まで上がったということで、素晴らしいことだと思う。地産外商とは、地に産するものを外に売るということだが、外から来られた観光客の皆さんに食べていただくということも地産外商だと思う。県外の方が来てくれてお金を使ってくれる、これは県外の方のお金がこちらに入ることなので、外貨を稼ぐこと、すなわち地産外商である。おっしゃるとおりで、高知は、食べ物おいしいところ全国1位、2位になった県なので、食を観光の売りとして、観光客の皆さんに来ていただくということを今後考えていけないといけないのではないかと考えているところである。観光版の地産外商は、県外からお客さんに来てもらうことではないかなと思う。Aさんがやっておられる直販所のようなところが観光地にたくさんあればいいと思う。観光客の方が、「このあの食事がおいしいから是非食べていこう」と来られて、そこで1時間、2時間滞在して下さって、お金を使っただけの場をもっと増やしていけないかなという思いである。高知県の中にも、いい観光地であるが、その周りに食事ができるところがないといったところがたくさんある。実にもったいないと思う。観光客の皆さんに来ていただいたときには、是非この地でしか食べられないものを食べていただきたい。おいしいと思っていただけたら、もう1回食べに行きたい、リピートしたいと思ってくれるのではないかと思います。なので、そういう場を増やしていく、これも観光産業と1次産業との連携であり、今後県が目指していくべき方向ではないかと考えている。直販所は、地域の産品を売る場で、地の利もあるし、多くの方が集まる場所なので、直販所をもっと観光拠点という形で使っていけないかと考えている。そこで食べていただく、併せて地域の観光情報などもお示しをして、地域の結節点として、その機能をフルに活かしていけないかということが一つの課題ではないかと考えている。それと、今、お話を伺っていてなるほどと思ったが、確かに、世代を超えたふれあいの拠点である。そういう場は、お箸の持ち方の話もあったが、他にも例えばきちんとあいさつをしましょうといった教育的な機能もあると思う。しかも仕事を通じてなので鍛えられる。直販所の意義について、その点は新しく教えていただけたと思う。

【宿泊観光客による食べ物の消費、シイラ加工、環境問題への対応】

Bさん：高知県漁協手結支所で地区委員をやっているBです。漁業の後継者不足は何が原因かと考えるとやはり収入面であると思う。少々きつくても、収入があれば何でも我慢してやると思う。20年前は、魚の値段は今の倍くらいだったと思う。今は原油などが上がって、家族を養うのも一苦労である。そして、付加価値をどうやって付けるかということが、大変大事なことだと思っている。大事に捕った魚を食べてもらうのに、高知に来てもらい、おいしいものをおい

しく提供したいわけだが、なぜあまり売れないのかというと、ただ観光で高知に来て食べるだけでは量は少しいと思う。宿泊して初めてかなりの量が売れていくのではないかと思う。高級リゾート地は難しいかもしれないが、また行きたいと思える、そこでリフレッシュできるようなリゾート地、宿泊施設があれば、かなりの量が売れていくのではないかと思う。

そして、シイラについて、すり身は昔からやっているが、かまぼこを今研究している。手結を代表する、高知県も代表するような魚なので、是非商品化を進めていきたいと思う。それと、今までになかった料理などを考えてみるとか、昔作っていたいろいろな料理を年配の漁師さんに聞くとか、そういうことも考えていきたいと思う。

この前、夜須町で文化発表会があって、中学生が環境破壊について発表したものを読みたいと思う。最終的には1次産業に関係あることだと思うので、ちょっと聞いていただきたい。「私たちが生まれる数十年前に起きたオイルショックのときに、一気に紙の値段が上がりました。すると、人々はこれはまずいと思い、紙の原料となる多くの木を植えました。しかし、今では木が生えすぎて困っている状況です。木が伸び放題になり、地面まで太陽が届かなくて、下草が生えていないところを梶ヶ森の登山のときに見ました。2学期には、そのような山の間伐にも行きましたが、間伐は思ったより重労働で、帰るときにはみんななくたくたでした。しかし、この作業をしなければ、土砂崩れが起きやすい山になってしまいます。もし土砂崩れが起きると、土砂が川に流れ込み、川に住むアユなどの生物はほとんど死んでしまいます。さらに濁った水が流れ込んで、磯焼けという海藻やサンゴが死んでしまう現象も起きます。海藻がなくなると、もちろん、それを食べて生きている魚たちも死んでしまいます。山に間伐に行ったときに、「山は海の恋人、川はその仲人」という話を聞きましたが、山、川、海は深く密接に関わっているんだなと思いました。」ということで、私は手結住吉県立自然公園の近くに住んでいるが、子どものころに、よく磯遊びをしたことを思い出す。磯焼けを是非解消して、また子孫に残していけるように取り組んでいきたいと思う。

知事：漁業の厳しさについて、魚価は下がっていて、また、原油価格が最近少し下がってきたとはいえ、まだまだ高い水準にあるということで、本当にご苦労が多いことだと思う。今回、産業振興計画をつくるのに当たって、重きを置いたことがある。漁業にしてもそうだが、今まで県が持っていたプランは、いかに効率的に魚をたくさん捕るようになるかということがポイントであった。今回は、どうやって高く売るか、流通や販売といった側面に重きを置いてつくろうとしている。鮮度管理や締め方によって高く売れるということがあるので、そういう点に重きを置いたということが一つ。もう一つが、シイラのかまぼこの話をおっしゃったが、鮮魚としてあまり高く値がつかないものでも、ちょっとした加工を加えることで、付加価値を付けて高く売れるようにするという点である。ただし、加工品を作ろうとするときに、最終の商品にしていくということは大変な場合もある。それなら、前処理の加工、つまり、頭を落として、内臓を取って、冷凍するというので、お弁当屋さんや外食産業さんに売れていくのではないかという、新しい販路の開拓にも知恵をめぐらそうとしているところである。そのときによく言われるのは、例えば冷凍施設がない、加工の場がないといったことである。すべてについて施設を新しく作るというほどのお金は今県にはないが、これは明らかにうまくいくのではないかというそれなりの展望が開けるものについては、必要最低限の設備を新たに整備していくと

いったことも考えていけないのではないかという議論を今しているところである。

次に、宿泊施設があればいいという話で、確かにあればいいと思う。その前に、果たして高知まで来てくれるのかどうかということもあると思う。高知県が今後目指していく観光のタイプは、他の県でやったような、海のそばにプールを作ってというタイプではないと思う。高級リゾート志向と言うより、むしろ、自然を活かして、自然の良さ自体を楽しんでいただくような体験型の観光といったものが高知県の売りではないかなと思う。リゾートタイプで勝負すると、沖縄県にはなかなか勝てないのではないかなとっていて、考えていけないと思っている。ただ、他方で、宿泊施設などの方が量がさばけるということも確かだと思う。地産地消をもっと徹底したいといったときに、まず直販で売るタイプがある。それに加えて、中食産業さんや外食産業さんにもっと売り込みをかけていけないか。中食産業さんや外食産業さんが材料をお集めになるときに、できるだけ地産地消率を上げていく、県内のものを使っただけにならないか。この取り組みを進めていけないと思っている。今日も経済同友会の皆様からご提言をいただいたが、やはり同じような意見を出していただいていた。中食産業さんや外食産業さんと、生産者とのマッチングというか、商談会のようなものを、12月の頭に初めてやることになっているが、こういう取り組みをもっと進めていけないか、知恵を練っていきたいと思っている。

最後の環境の話で、「山は海の恋人、川はその仲人」という言葉があった。高知県の環境基本計画について、11月に答申をいただいて、そのキャッチフレーズが、子どもたちに知ってもらいたいということで、「空・山・川・海みんなともだち」である。森の間伐を進めることによって、川が豊かになり、またそれが磯を豊かにしていく。こういう全体がつながっているメカニズムは、すごく大切だと我々も思っている。川の上流側から下流の皆様まで一緒になって、環境を大切にしていって運動を進められておられる地域もたくさんある。一番大切なことは、その出発点である森の間伐といったことをしっかり進めていくことなのだろうと思う。県民の皆様にご理解を賜って、高知県は全国に先駆けて森林環境税をいただいているが、その環境税を使って間伐をする対象範囲を、第2期は大幅に広げて加速しようとしている。そして、協働の森事業、これは日本の名だたる企業さんも含めて、今度35件目の締結をしようとしているところである。これにCO₂吸収証書をつけて、どれだけ環境に対して効果があったかということを見える形にして、県外の企業さんに売っていかうとする取り組みを新たに進めようとしている。そういういろいろな取り組みによって、高知県のような県こそが、例えば山の間伐などを進めていくということの先頭を切っていくと出来ないと思えない。なかなかお金がない中で、さらに、高知県は山が険しいので大変なところもあるが、少なくとも知恵出しという点においては、全国に先駆けていきたい。低炭素社会のトップランナーを目指すと、今我々は言っているが、いろいろな知恵を出してそういう取り組みを進めていきたいと思う。

【消費動向の調査、販促活動、トレーサビリティ、脱化石燃料の環境対策】

Cさん：香我美町でミカンを作っていること申します。今日もミカン、ハサミの音も軽やかにチョコキンチョコキン（貯金貯金）と採りたかったが、油も切れたのか、シャッキンシャッキン（借金借金）と農家もみんな苦労している。（会場笑い）県、市の助成をいただいて、選果機が新しく導入されることになって御礼申し上げます。また、施設の多重被覆に関しても、県から

ご支援いただいて、ハウスミカンに関しては、ほとんどの農家が取り組むことができた。30%くらい重油の削減ができたという人も出ている。

私は、2つのキーワードを部員の人などと話している。それは、「入るを量りて出ずるを制す」と「4つのK」で、4Kは、健康、しっかりした家庭、しっかりした経済、そして、志を持ってやっていこうである。「入るを量る」の面では、面積における単収の増、秀品率向上、そして一番売れ筋のS、M果の生産に努めるよう、年に7、8回の現地研修、また、出荷協議会や反省会などを行って、技術の向上・安定に努めている。また、延べ80人くらいの女性委員さんに県内外で消費宣伝を行っていただき、消費者の声を聞いて、フィードバックもしていきたいと思っている。消費動向の調査も難しい面があるので、県のご支援もいただければと思う。特に、商品計画機構から1次産業を外していただいたのは非常にうれしく思っているが、デパートで販売をしているので、そちらを今後どうしようかなと思っている。「出ずるを制す」の方は、特に重油対策にずっと取り組んできて、かなりの経費削減になっている。地産地消、地産外商という面においては、露地ミカンは95%くらいが県内で消費され、ハウスミカンは県内が約6割で、県外には4割程度の出荷量になっている。4Kの中の志については、山北ミカンには約150年の歴史があるし、ハウスミカンは35年の歴史がある。先人、先輩方が築き上げてくれた努力に対して大変感謝している。それに報いるように努力をしたいし、ご支援をお願いしたい。ハウスミカンは現在102名の生産者がいるが、若者も40名ほどいる。20代、30代もかなりの人数がいるので、私たちの次の代の生産者として、自分たちも栽培技術の伝承や販売に努力しなければならない。そちらの方でも県の支援をお願いしたいし、(高知野菜の)11品目の宣伝をやっていると思うが、少しでいいので、高知の果樹の宣伝もよろしくお願いしたいと思う。

また、安全・安心ということに関しては、6年前からトレーサビリティに取り組んでいて、GAP(農業生産工程管理)の検討をしようかと思っていたが、重油の高騰対策をやっていたので、保留になっている。脱化石燃料、低炭素運動の中で、電気などのいろいろな研究をしているが、個人的にやるのは難しい。今、県の補助をいただいでできるのが、ヒートポンプと木質バイオであるが、他にもあるので、一緒に共同開発などができないだろうかと考えている。環境と施設園芸・果樹は相反する面もあると思うが、特にこれから重要になってくるのではないかなと思う。最後に、「農は国の本」なので、農家に明るい話題をいつも与えていただきたい。経済も急には回復しないと思うが、多少の貧しさはあってもいいし、心豊かに安心して暮らせる県にしていきたいと思っている。

知事：初めの方の話で、商品計画機構にもお触れになられた。まだ完全に決まっている話ではないが、今考えようとしているのは、商品計画機構のような組織を、発展的に解消するというか、大切なことは、県みたいところが汗をかいて、そのリターンが全高知県内の生産者の方々に及ぶような販促の活動を、高知県が県としてやっていかないといけないのではないかなという思いである。独立採算制というやり方をすると、どうしても自らの売り込みを図る、いわば生産者の方々の助ける組織自体の存続を考えていかないといけなくなる。ただ、そういう利己的なことよりも、利他的というか、汗をかいていくことで、生産者の方々に利益が及んでいく組織づくりをしていかないといけないのではないかと、今その研究を進めているところである。また、生産段階から消費者の皆さんの声をフィードバックするというをおっしゃった。県外、

特に首都圏などでは、消費者は世界のものを見ながら消費行動をしている。その中で、高知県が強みを持っていくためには、どういう商品開発をしていかないといけないのか。そういうテストマーケティングなどをする場が必要ではないかということで、今、アンテナショップの議論をしている。アンテナショップが単体で儲けるということよりも、テストマーケティングの場などとして使っていただくようにできないか、これは生産段階の話である。次に、販売段階の話だが、高知県には昔、マル高というものがあって、県の職員が直接売り込んでいた。今の時代は、県の職員が直接ビジネスをするということではないが、ビジネスをされる民間の方々の後押しをするような、例えば、テストマーケティングで磨き上げた商品売り込む際の一番難しい販路の開拓のときに、県の職員も生産団体の皆さんと一緒に活動ができないか。県の信用の下に一定程度相手方も胸襟を開いてくれるということもあるのではないかと。そういう一連の動きをする新しい組織をつくっていきたいと思っているところである。その中で、非常に大切な点として、先ほどから付加価値の話をおっしゃっているが、生鮮のものについての付加価値で重要な点、トレーサビリティの話をおっしゃった。安全・安心志向がこれだけ高まり、偽装問題がこれだけ問題になっている中で、是非ともトレーサビリティを日本一徹底した県になりたいと思っている。それに県も認証を付していくことで、どこよりも徹底している県にしたいと思っている。農業振興の大きな柱の一つにしたいと思っている。それができれば、他県に負けない製品づくりができるのではないかと。実際、トレーサビリティは他県に比べて進んでいるので、この強みをそのまま活かしていきたいと思っている。

脱化石燃料については、現在（燃油の）価格も下がってきたところだが、また上がり始めるかもしれないし、また、環境対策という観点からも重要だと思う。電気などはどうかということをおっしゃったが、実は、県議会でもいろいろ議論も賜ったところである。乾燥しすぎて、例えばウドンコ病になるのではないかと十分な点があるようで、引き続き研究を重ねないといけないが、重油だけではなくて、いろいろな手段を持つということが大切だと思うので、これは技術センターでも、今後開発を進めていくことが課題になっていると思う。

「農は国の本」という話はそのとおりで、高知県にとっては1次産業は、本当に大切だと思う。高知県で外貨を稼げる産業は、1次産業が観光である。工業でキラリと光るところで稼いでおられるところもたくさんあるが、1次産業を基軸に据えて、1次産業から波及する2次産業、1次産業の強みを活かす観光業といったものを目指していかないといけないと思う。ないものねだりをするのではなくて、自分たちが持っているこの1次産業の強みを基本に据えて、産業を振興していくことが大切だと思っている。

【鳥獣被害対策、行政の協力、中山間地域での生活】

Dさん：私は香南市香我美町口西川、いわゆる中山間地域といわれるところに住んでいて、山北ミカンを作っている。今、ミカンの収穫の真っ最中なので、毎日段々畑に上がっていくが、毎日イノシシが新しく荒らした痕跡がある。道はイノシシに壊されて、タヌキやハクビシンやカラスにミカンを食べられ、その残りを私たちが収穫しているというような状況である。この間の新聞にはシカの食害の件が出ていた。2、3年後にはもっとひどいことになるのではないかとと思っている。個人の力での対策というのは、追い払うことだけしかできないので、行政の本腰を入れた対策を是非ともお願いしたいと思う。

もう一つ聞いていただきたいことがあって、私たちの地区には、西川活性化推進協議会という、自分たちの地域を何とか活性化したいという、熱い思いのある者たちが集まって作った会がある。10年前に「あぐりのさと」という自分たちの拠点となるふれあい広場を作った。その話をし始めると時間が足りなくなるので省くが、その活動をしている中で、幾度か壁にぶつかった。それは、行政にお願いをしたときの「費用対効果」という言葉の壁であった。私たちは行政におんぶするのではなく、自分たちの力でできることは自分たちの力でと思って、一生懸命やっているのに、何と情けない言葉かと思った。財政難の折、そういう尺度で計らなければならないときがあるというのは、よく分かっている。しかし、自分たちで一生懸命やろうとしている住民の気持ちに対してそういう言葉で返すということで、行政に対してすごく不信感を抱いた。香南市として合併するときも地域のみennaと話したが、いくらきれいごとを言われても、いずれ私たち山の人間は捨てられると、今でもそういう危惧を持っている。ただ、そんなことばかり言うてはられないので、私たちが今できることは何なのかと考えて、まずは実績を作らないといけないということから、地域の学校給食に、自分たちの野菜や、ミカンや、作った味噌を提供したり、地域を花いっぱいにしようとして、サクラや、モモや、サルスベリの木を何本も植えたりした。来年はきっときれいな花が咲くと思う。政（まつりごと）というのは、人を知るといふことも大事だと思う。普通のおんちゃん、おばちゃんであるが、一生懸命やっている私たちがここにいていふことを知事さんに知っていただきたいと思う。

知事：私はいろいろなところでシカの話盛んに聞いていて、嶺北でも、香美市でも伺ったところだが、最近ではイノシシが出ていますか。

Dさん：はい。最近というわけではなく、もうずっと前からである。

知事：イノシシもいてシカもいるということですね。鳥獣被害対策事業のあらましという資料をお手元に配っているので、そちらもご覧いただきたいと思う。最近、シカが大問題になっていて、また、サルの問題もあり、シカとサルの話しか書いていなくて申し訳ないところである。鳥獣被害について、私も最初のころはよく分かっていなかったが、勉強させていただくと、木の皮を全部食べてしまつて、下草もなくなり、それで地すべりや山崩れが起こったりするくらいのインパクトがあるそうで、改めてこの被害を認識したところだった。シカ対策について話をすると、イノシシに比べて、シカは食べる場所が少ないので捕つても割に合わない。狩猟期に、猟師の皆さんが、イノシシはまだ捕ろうとする場合があるが、シカはあまり儲からないので、そもそも捕らないということであった。このままではシカの数減らすことができない、狩猟期にもシカを捕つていただけるようにということで、メスを捕つていただくと1万円、オスを捕つていただくと5千円をお支払いするということを始め。抜本的なシカ対策ということで力を入れて始めたが、「メスとオスをどう見分けるのか」といったご批判もいただいているし、捕るときには各市町村で連携して一斉に捕獲するといった取り組みも重要だとも伺いする。とりあえず、今年の狩猟期はこういう形でやらせていただき、伺ったご意見を踏まえて見直しも続けていきたいと思っている。また、サル対策についても非常に苦労して、すばしっこいし利口なので、なかなか鉄砲でも撃てないし、フェンスを張つてもそれを乗り越えて

やってきたりなどということもある。シカについては、今回、初めてかなり踏み込んでやり始めたつもりではあるが、試行錯誤を繰り返させていただきたいと思っている。我々も鳥獣被害対策は大変重要なことだと思っている。

2番目の「費用対効果」の壁というお話について、商売としてやっていただく中で、いつまでも赤字のものを何とかするというわけにはいかないところもあるのだろうと思うので、費用対効果を完全に無視することはできないと思う。ただし、初期の段階で、特に立ち上げが大変だとか、初期投資が大変だという部分について、いろいろバックアップさせていただくことはあるのではないかと思います。政は人を知ることが大切であるとおっしゃったが、地域地域で一生懸命やっておられるお取り組みを、お金のことだけではなくて、ソフトの面などでも、どうやってバックアップさせていただけるか、そういうことを考えていくことが是非とも必要ではないかと思っている。できれば、雇用、収入を生むような仕組みづくりにつなげていっていただきたい。そういう意味で、冒頭に地域アクションプランづくりを行っていくということも申し上げた。地域の人々の生活を支えるような事業を育てていくという観点からご検討いただきたいということで、市町村の皆さんとも共同して今つくらせていただいているところである。もう一つは、地域地域のいろいろな、例えば花いっぱい運動などもあるかと思うが、そういうお取り組みもご支援させていただきたいということで、高知県では、60人の地域支援企画員を全県内に派遣させていただいている。直接的な産業の振興ということにかかわらず、地域のにぎわいの創出などについて、きめ細かく対応させていただくという役割を負ってのもいるので、是非ご相談もいただきたいと思う。山の人間は捨てられるのではないかとおっしゃったが、高知県では多くの方が中山間地域に住んでおられる。中山間で暮らしていけるような産業づくりについて、本当に真剣に考えていかないといけないと思っている。にぎわいも大切だが、さらに一歩進んで、暮らしていけるようにするためにはどうすればいいかということも、全力で考えていかないといけない。20年度は中山間対策事業をかなり強化したところである。2点あって、1点目は先ほどの産業をつくるということ、もう1点は、暮らしていけるようにすることである。後者は、都会の人には想像もつかない話だと思うが、水道の確保と、病院に行ったり買い物に行ったりするときの足の確保で、例えば軽トラックを購入するときに補助金を出すとあったことがある。もう一つ、暮らしていくためにどうすればいいのかということについて、ポイントは、中山間地域で土地が狭いという条件でも、それなりに収入を得ることができるような作物の普及である。中山間に適した園芸作物もあると思うが、他にも、今、牧野植物園と共同で薬草の研究を行っているし、鶏をもう少しうまく活かさないか考えている。この間、四万十町に行ったときにはシイタケも適しているとお伺いした。育てるのに比較的手間がかからず、連作して、トータルで収入を上げられる作物探しをしている。中山間地域で暮らせる産業をつくる努力をしていて、研究を進めていきたいと思っている。

～休憩～

【健診率の上昇のための行政の努力】

Eさん：香南市夜須町でブランドスイカを作っているEと申します。今日は是非知事に聞いていただきたい私の考えがある。農業の世界に入って、地域に根付いて生活をする時間が増えて、

見えてきたのは、農業を営むにはCさんが言われたように、健康が何よりであるということである。知事が目指しておられる県づくりの骨格にも長寿県ということが掲げられているので、農業人口が多い高知県の中で、いかに農業者が健康であるかということを中心に真剣に考えないといけないと思う。男性は農業に就農して5年くらいすると、流行りのメタボリックシンドローム的な体系になっていて、40代前後ではかなり多い。住民に対しての働きかけが少し弱いような気がする。第1次産業、自営業の人は国保なので、メタボリック健診は今年から特定健診になったが、その健診率が上がらないと、私たちの国保料に即はね返ってくるということになる。ほとんどの方はそういうことを知らないのだから、みんなで取り組むためには、住民をどう動かすかということ、しっかり市町村と県が考える必要があると思う。一つ提案として、健康推進委員さんが各地域にいるらしいが、私たちの地区の推進委員さんには、近年お会いしたことがない。多分活動されている方々は、家事や育児をひと段落させた50代後半から60代の方が中心だと思うが、私たちの世代をその人たちにくっつけてうまく教育をしていかないと、私たちの世代は本当に豊かな時代に育っているので、人のためにということをなかなか考えられない世代になってきている。県や市町村が先導役になって、活動したいと思っている住民の後押しをしてほしい。そして、先ほど知事が言われたように、県が汗をかいて県民に利益を返す、そういうことの先頭に立っていただく支援員さんたちは、常時各地域をうろろして、頻りに私たちに姿を見せてくれていて構わないと思う。それが仕事だと思う。市町村の職員なども、デスクワークをしていただけないと思う。香南市には、多彩な産業もあるし、観光地となる自然もいっぱいあるので、そのトップセールスができるくらいの知識を蓄えてほしい。私たち住民は生活に追われていて、そんな時間は少ない。最後に、農業と保健の分野は密接に関係があると思うので、生活実態の調査などには、農協などをうまく使って、周知徹底させるようなこともしてほしいと思う。県が農協だけに肩入れすることはできないと思うが、全国的な大きい組織であるし、私たちは農協をよりどころにして出荷・販売をしているので、農協の職員をきちんと教育して、農協が情報の発信基地になれるような使い方もしてほしいと思っている。

知事：メタボ対策、特定健診の推進には、「よさこい健康プラン 21」というものをつくって、進めようとしているところであるが、今のお話では、浸透力がまだまだ弱いということですよ。

Eさん：アンテナを張っている私に伝わってこないのだから、アンテナを張っていない一般の人には全くと言っていいほど伝わっていないと思う。

知事：今おっしゃったように、例えばAさんなども通じて推進していくといったことを考えないといけないかもしれない。関係部局にも伝えて、どういう対策を取ればよいか考えてみたいと思う。徹底していくということは大変である。

Eさん：うまくいっているモデル地区としては梶原町があって、推進委員さんがかなり動いていて、80%以上くらい健診率があると思う。活動したい住民はたくさんいると思うので、うまく住民を使うことを考える必要があると思う。

知事：おっしゃるとおりだと思うので、勉強したいと思う。

【産業振興計画の農業部門について】

Fさん：私はハウスマカンを作っている。県の産業振興計画の中の農業部門について少し話をしたいと思う。「消費流通構造の変化に対応した生産から販売までの一元的支援体制の構築」ということであるが、非常に分かりにくい。生産から販売までというテリトリーが広すぎる。これは地産地消から地産外商という、知事さんがおっしゃっている話の内容にも入っていくが、現在の高知県の地産地消は、観光も含めてということにはまだ至っていない。もう一つ、地産外商の面で、1.5次産業、雇用創出ということは、知事さんだけではなく県議会議員の先生もみんなおっしゃっている。しかし、まだ実現できていない原因は、農業を熟知せずに1.5次産業ということを考えているからだと思う。「生産から販売まで」という言葉、1.5次産業という言葉を使うが、生産の現場のことも知らない、作り方も知らない、働いている人の人格も知らない、志も知らないということでは、話し合いの場を持っても多分実現しないと思う。過去に、いかに観光業者に高知県の農業をPRするか、観光農業としてPRできないかということに取り組んだことがある。それで残っているのが、11月25日の高知新聞に載っている文旦の観光農業であるが、本当にごく一部である。また、地産地消から始まって成功したのは馬路村しかない。追随しようとしても無理だろうと思う。なぜかというと、東谷組合長さんのような人材がいらないからである。地産地消を徹底するのであれば、地産外商と結び付けられるようなコーディネーターが必要である。しかし、それは視野が狭い農協や公務員にはできない。何事にしても、リーダーシップをとる人、器の大きい人、コーディネーター役のできる人といった人たちがたくさんいないと、直売所をいくら作っても、いろいろな加工をしても、長続きしないと思う。吉川町で浜美人というラッキョウの加工について、地域支援企画員の窪田さんに非常にお世話になっているが、地産外商の加工流通業者の人たちが思っていることは、大量生産できる、つまりコストを下げられるということである。そのためには機械が必要で、設備投資をしないといけない。そういうことは、小さな量販店や小さなグループが地域でいくら頑張っても長続きしない。なので、産業として成り立つか成り立たないかということよりも、そういう楽しさとか人生の醍醐味とかいったものが、1次産業にも残っているので、それを大切に生きていくことから始まって、それが産業に結びつかないと持続しないと思う。それが言いたいことである。もう一つ、生産から販売までの一元的支援体制ということ考えたときに、いつも園芸連や農協という言葉が出てくる。しかし、先ほども言ったように、ずっと農協で働いている人には、農協の外からの目がどうしても作れないと思う。なので、そこに外からの目として、コーディネーター役の人たちを入れる必要があると思う。今さっき知事さんがおっしゃった、いわゆる新マル高方式というものをこれから構築するとするならば、リサーチに力を入れて構築してほしいと思う。

次に燃油高騰対策の話だが、高知県の農業の基盤整備をすれば、今県のやっているレンタルハウス事業は最高である。これを他の県が見習って、レンタルハウス事業を取り入れている。高知県は暖かいところだが、暖かいからこの地の利を活かしてさらに少しの加温をして、他の県を出し抜いていくことが必要だと思う。レンタルハウス事業の中の加温については、同

じように認めるといった制度を作るとよいと思う。私のハウスは、第1次のオイルショックのときにプロパンガスに替えた。利点として、炭酸ガスを取り入れられるということがある。炭酸ガスで同化作用が活発化するので、水をあげると、それと同時に肥料もたくさん吸うので、増収になる。生産にとっては素晴らしい。土佐市の天皇賞を取ったグループが年間15トンしか取っていないが、オランダでは周年栽培をして30トン取っていて、そのポイントは炭酸ガスである。また、知事さんが言った、国内排出量取引制度について、私のところは1ヘクタールあるので、300トンくらい炭酸ガスを植物にリサイクルしている。それは売れるが、そのコーディネートはどこがしてくれるのか。東京に民間でやっているところがあるが、お金がかかる。なので、そういうことも含めてやっていけば、環境も含めていろいろなことが良くなっていく。高知県の将来は、ここにかかっているのではないかと。1次産業で十分であると思う。1.5次産業はいらないかもしれない。

知事：まず、レンタルハウス事業の話について、確かに非常に有効だと思っているので、制度をもっと拡充できないか今研究中である。担い手対策や、規模拡大という観点からも重要な施策で、これは一つのメインエンジンかなと思っている。

炭酸ガスの濃度の話については、また勉強させてもらいたい。軽々に素人の私が今すぐお答えできることはないが、一つご意見として教えていただいたということだと思う。

「生産から販売までの一元的な支援体制」の話については、確かに言葉が分かりにくいかもしれない。マスコミさんも分かりにくいとおっしゃる。ただ、ここで、販売の支援体制だけではなく、生産の支援体制というものを入れているのはなぜかという、正に今おっしゃったりサーチである。県外、都会で売れる商品、外から来られた方にも魅力的だと映るような商品を作っていくためには、企画の段階で練り込んで、他ではできない付加価値のあるものにしていかなければならない。それを作っていくためには、マーケットのサーチが必要不可欠である。外からの目、世阿弥の離見の見である。それを制度的に組み込んでいくためにも、都会などでのテストマーケティングといった機会も設けたいと思っているし、外部の専門家なども入れていかなければならない。借金をして、設備を造って、商品を製造し始めてから大失敗すると大変なことになるので、事前に企画をしていく段階で失敗をして、改善し、それなりにいける状態になってから設備投資をするという順番なのだろうと思う。おっしゃるとおり、サーチを大切にすることから、生産から販売までの一元的に支援体制としている。生産の支援には、外の目を入れていくことも大きな要素になってくると思っている。

そして、人の話であるが、おっしゃるとおり、東谷組合長さんのような、私も最も尊敬する人物の一人だが、ああいう立派な方がいらっしゃって、リーダーシップをとって、コーディネートしてやっていくということが是非とも重要なのだろうと思う。ただ、人を育てて初めて物事を始めるのか、物事をやるから人が育つのか、そこは難しいと思う。今から人を育てて、その上で初めて物事をやり始めようといったときに、どれだけ時間がかかるのだろうか。高知県にそういう人材がないのかというと、よさこい祭りなどを生んだ高知県には、いろいろなアイデアマンが地域にいらっしゃると思う。そのアイデア、やる気、気力といったものが、具体的な仕組みに結びつくということが今までなかったということもあるのではないかと。なので、それを今回、資料の4ページにあるとおり、地域アクションプランでやろうと思っている。是

非ともこういう形で進めていきたい。技術的な話になるが、2ページの下の真ん中のグラフをご覧くださいと思う。和歌山、広島、徳島、高知、沖縄、山梨、香川とある。農業産出額が大体同じような県である。それぞれの県に2つ棒グラフがあって、左側の棒グラフが農業算出額、右側の棒グラフが食品を加工して売ったという、食料品製造品出荷額である。ご覧いただくと分かるように、農業産出額を分母に、食料品製造品出荷額を分子にとると、高知県以外の県はすべて1を超えている。高知は0.71で、全国第45位である。高知県だけできないということはないはずだと私は思っている。

Fさん：この内容について、県内企業がどれだけの割合いるか。問題はそこだと思う。

知事：おっしゃるとおりで、加工業者が地場の原料を買っていないのではないかという問題がある。香川はこの比率が4ととても高いが、それは例えば輸入した小麦粉でうどんを作っているからである。ただ、元々地場の小麦でうどんを作っていて、産業化することに成功して、さらにビッグなビジネスにするために輸入品も組み合わせているわけである。こういうことが残念ながら高知県では十分に育って来てなかった。高知県などで、今後外にも売れる商品づくりといったときの戦略産業として、こういうものを是非とも育てていかないといけないのではないかと思う。成功しているところでも、加工は外で行ったり、原料は高知県のものでなかったりしているので、このマッチングが必要である。ただ、今おっしゃった話で、なるほどと思ったのは、単に商談会をやったりするだけではだめではないかということである。表面的に商談会などをやるだけではない、単にマッチング支援というだけではない、もっと人と人とが知り合う機会について考えたいと思う。

【県の文化・伝統芸能振興、地域支援企画員制度の存続】

Gさん：4年前に絵金蔵ができたときに飲食店を始め、昨年弁天座ができると同時に、弁天座のボランティアに入って活動している。知事さん、今年7月の絵金まつりのときには、お忙しい中おいでいただき、本当にありがとうございました。地域で活動している私たちにとっては、知事さんが足を運んでくださるということは、自分たちの活動に自信と誇りを持つことができる。次にそういう機会があったら、カツラも大変お似合いだと思うので、今度は舞台の上に出演していただければ本当にうれしい。

昨年弁天座が開館したときに、こけら落とし事業として、県内で活動している津野町、いの町、高知市、香南市の4つの団体が合同公演として芝居をした。そのときに、高知県民俗芸能ネットワーク協議会を、県の地域支援企画員さんたちが中心になって立ち上げてくれた。その会が今年は民俗芸能ネットワーク事業という形に変わって、5年計画で、今まで自分たちが単独ではなかなかできなかった後継者育成など、例えば三味線などには、短くて20年くらいの月日がかかるが、それに取り組むように、今準備してくださっている。津野町やいの町でもできなかったことということなので、みんな喜んでやっていると思う。財政が厳しい中で、一番最初にカットされていくのは、こういう文化などに関連したものだと思うが、今年やって、来年にその結果が出るというような事業ではないので、県でも未永く温かく見守っていただきたい。

15年くらい前に、絵金歌舞伎というものを立ち上げたときには、旧赤岡町の行政の方たちが本当に良くしてくれた。「こんなことをしたい」と言ったときには、「じゃあ、これならできよ」と、キャッチボールができ、本当に恵まれた環境の中でいろいろな事業ができたという思いがある。昨年、弁天座ができたときに、絵金歌舞伎のメンバーが中心になって、指定管理者となって管理を行うことになったが、そのときも、県の地域支援企画員さんたちが、香南市の行政の方たちとの間に入って、住民の気持ちになって、ここまで弁天座運営委員会を育ててくれた。本当に感謝している。まだ十分なことができていないので、この県の地域支援企画員さんという制度は、まだまだ長く続けていっていただきたい。

最後に、NHKのBSで絵金を紹介する90分番組が12月17日に放映される。これは、高知県、香南市、赤岡町のすごいPRになると思うので、是非皆さんご覧になっていただきたい。

知事：津野町に行ったときも、いの町に行ったときもそう言われた。絵金歌舞伎を見させていただいたときに、ちょうど隣にいの町の方がいらっしゃって、そのときにもそういう話をいただいた。文化・伝統芸能の伝承は、本当に大切なことである。ただ、今は財政状況も厳しいので、すべてのことを潤沢にというわけにはいかない。文化の伝承や社会福祉の向上ができる地力をつけるためにも、産業の振興を一生懸命やらないといけないと思っているところである。他方で、そういう伝統芸能こそが観光資源であり、産業の振興に資するものにもなるのだろうと思う。絵金蔵や弁天座さんは、伝統芸能を活かしながら、町おこしや、地域の振興につながっていて、うまくやっておられると思う。高円宮妃殿下が来られたときも非常に感心しておられた。そういう形で、一石二鳥、三鳥になるように考えていくことが今の時代、特に高知県では大切なだろうと思っている。是非頑張ってくださいと思う。

地域支援企画員の制度は、実は時限的な制度で、いずれ廃止する制度になっていた。ただ、今回、産業振興計画の策定の過程で、地域地域のアイデアを形にという議論をし始めた。地域アクションプランづくりなどには、今主力となって働いてもらっているところで、今後、産業振興、地域での暮らし、産業づくり、にぎわいづくり、そういうものが地域アクションプランに入ってきて、それを実行していかないといけない。そういう意味で、一時的な制度ではなくて、今後も恒久的な制度として残したいと思っている。今は役割を強化して、にぎわいづくりなどの次のステップとして、産業おこしや、地域で暮らせるという発想を明確なミッションとして持ってもらって、仕事をしてもらっている。従来に比べてちょっと仕事が忙しくなっていて、もしかしたら皆さんとお会いする時間が短くなっているかもしれないが、役割を強化する反面、将来的にもこういう制度を存続させたいと思っている。

【「龍馬伝」終了後のドラマ館の活用の仕方、「龍馬伝」の高知県全域への波及、観光案内窓口】
Hさん：香南市観光協会の事務局長のHと申します。産業振興計画の資料2ページの、主な施策の中にもあるが、NHK大河ドラマの「龍馬伝」が平成22年に決定している。これによって、JR高知駅前にパビリオンができるとお聞きした。香南市には、今月11月に20周年を迎えた龍馬歴史館という施設がある。龍馬関係で言うと、高知市内には坂本龍馬記念館と龍馬の生まれたまち記念館があるが、この大河ドラマは観光の宿泊客の減少している中で、都会から誘客をする、そして宿泊客も増やす絶好の観光チャンスだと思う。パビリオンができて、ドラマが

放送されているときは、たくさんの方が龍馬歴史館にも来てくださると思うが、放送が終わった後は、駅前のパビリオンができることによって、歴史館や記念館のお客様がそちらに取られるのではないかと感じる。パビリオンの放送終了後の活用の仕方をどのように考えられているのかをお聞きしたい。

次に、そういう大きな箱物も大変重要だと思うが、「龍馬伝」はせっかくのチャンスである。安芸には岩崎弥太郎がいて、香南市には龍馬歴史館もあるので、宿泊客を増やすという意味でも、例えば施設を回って、さらに宿泊をした人にはそれぞれスタンプを押していただいて、この際、龍馬を高知県で丸ごと知っていただくようなスタンプラリーを行うとか、応募して下さった方には龍馬グッズが当たるというように、大人にも子どもにも喜んでいただけるようにするべきではないか。1日中高知県で楽しんでいただけて、高知県全域にブームが波及するように、パビリオン以外のことも考えていただきたいと思う。

最後に、ときどき、JR高知駅に降り立った観光客の方から香南市の観光協会に問い合わせのお電話がある。例えば、夜須町のヤ・シィパークに行きたいがどうやって行けばいいのかと。私は、JR高知駅に観光の窓口があると思っていたが、それが十分に活かされているのかなと思った。また、高知龍馬空港から来られたお客様が、例えば15時くらいに香南市に来て、今から四万十に行きたいが、泊まらずに行けるのかとお聞きになることもあった。どうしてもっと親切に空港の窓口で対応できるスタッフがいらっしやらないのかなと、いつも疑問に思っている。高知県には、おもてなし課や、花・人・土佐であい博推進課といった他県にはないような課があるし、観光コンベンション協会もあるので、そういった方々のご指導をしていただければと思う。「龍馬伝」が控えているので、本当に心のこもった対応が必要であるし、観光の知識をたくさん持っている方がご案内することが必要だと思う。

知事：「龍馬伝」について、JR高知駅の近くにドラマ館を造る予定である。その後どうするかという話について、この間、第1回の検討委員会があって、費用対効果も考えながら中身を今後詰めていくという話をした。今後も、どういう形で使っていくのかということについて、継続的に検討を続けていくことになる。いろいろな既存施設も見したが、千人規模くらいを確実に安全に収容できて、災害があっても大丈夫で、かつ常設の展示ができて、かつ交通結節点にあるという地がどうしても見つからなかったのが、仮設でやるしかないのかなと考えている。ところが、今どきの仮設は、本当に長く使えるようである。仮設的な建物でありながらも、先々も含めて利用して、十分ペイするものをどういうふうにつ造っていくかについて、研究を重ねているところである。JR高知駅に来てどうやってヤ・シィパークに行けばいいのかと問い合わせがあったとおっしゃったが、コンセプトとしては、来られた観光客の皆さんに高知県を総合的に見せるところ、案内をするところが必要だということである。高知県は、鉄道が発達していないので、観光地への行き方が非常に難しい。2次交通が発達していないことが問題で、これを今改善しようとしているが、かなり丁寧な説明が必要で、さらに、行った先でどういういいものがあるのかということを見せることで、より多くの人に高知県の観光資源をより深く知っていただく、そういう場が必要ではないかという発想である。そこで観光客の方を全部一人占めにしてしまっただけという発想ではなく、「龍馬伝」の機会を活かして、県内全域に観光客の皆さんに足を運んでいただくための、いわゆるモーターみたいなものである。ド

ラマ館としてドラマを見ていただくが、それで留まるのではなくて、県内の観光パノラマを見ていただき、是非行きたいという方には、行く方法や行った先では何があるかということをお示しするような施設を準備してはどうかという議論をしている。

「龍馬伝」なので、是非、龍馬を取り巻くいろいろな仲間のところ、いろいろな地域に行っていたきたい。「功名が辻」のときの轍を踏んではいけないと考えている。あのときは高知市は観光客は増えたが、減ったところもあるという状況であった。高知県全域で観光客の皆さんが増えるようにしないといけない。龍馬は、幕末の諸先輩、同輩、後輩たちの一つのシンボル、スターである。仲間たちがたくさんいるわけで、その仲間の地域を併せてPRすることで、それぞれの地域にも足を運んでいただけるようにしたいと思っている。観光客の皆さんの人の流動が一番多いところはどこかと調査すると高知駅であった。そういう意味においては、駅前には、先ほど申し上げたような機能を持たせるものとしては、最適な地ではないだろうかと思うが、まだまだ詰めていかないといけないという段階である。とにかく、まず2次交通を使って、地域まで行っていただき、そこから、例えば周遊バスといったシステムをしっかりと組んで、関係の観光地を回っていただけるようにしていきたいと考えている。思いは全く一緒だと思う。

【大規模ショッピングセンターの活用、高知県の伝統的工法の発信、食品加工の不遇、外国への売り込み、独身男女の出会いの場づくり、空港から東方面へのバス路線】

Iさん：私はフジグラン野市をオープンさせるときから関与している。現在テナントとして残っている地元業者は7店舗くらいである。最初、フジが進出するときに、想定としてあったのは、商圈10万人、香南市と香美市と南国市の一部だったと思う。それで、約3万世帯でシェアが10%くらいは取れるのではないかと、それだと62~63億になると思うが、現実的には50億前後ではないかと思う。先ほど農業でいろいろご苦労なさっている話を聞いたが、フジ自身も地元の産物を入れたいということで、私たちも何かルートはないかと探したが、外から入ってくるスーパーに対しては非常に抵抗感があった。特徴のある地元の食材を入れたいのはどのショッピングセンターも同じであると思うが、高知県の人はこれをうまく活用していない。食品について、どのくらいこの商圈で需要があるか考えると、1世帯当たり月7万円で計算して、年間で252億円になる。その10%は25億円で、食品館の売上げから見るといい線である。売り方が全然違う形態のものが入ってきたときの頭の切り替えというか、アプローチの仕方が全然できていない。我々も何とか地元を応援したいと思って手を尽くすが難しい。良心市が発達しているので個人で入れたがる状況があるが、そんなに口座を作れない状況があって、組合か組織をつくって管理していただくというやり方ならいける。また、良心市のものは、農薬がどういう使い方をされているのか分からないというお客さんの声もある。

市場については、先ほどFさんが言われたように、高知県だけで私は回っていくのではないかなと思う。2次産業というか、大工さんについて言っても、高知県では土佐漆喰が多い。一時期、アトピー対策などのときに、県外の工務店がすごく見学に来た。今はまだその工法が残っている世代だが、もう少しすると、もうその伝統的な工法がなくなってしまう。そういう伝統的なものも、プロジェクトを作ってうまく中央に発信すればよいと思う。どこかの県で、左官大学のような左官を集めて教育しているというのを聞いたことがあるが、高知県独特の建物を発信すればよいと思う。

食品については、はっきり言って加工は私は向かないと思う。というのは、高知県の酒は辛口であるが、これは加工用の食品に合わない。それだけいい農産品である。私たちは、毎年、年2回、最先端のショッピングセンターに視察に行くが、いつ行ってもおもしろくないところが生鮮コーナーである。高知の方がおもしろい。それだけ高知はバラエティに富んでいる。食材に関しては、Fさんが言われたように、高知に来て鮮度のいいものを食べていただくのでいいのではないかと。それと、地酒が豊富なので、酒のヌーボーというようなキャッチフレーズでやっていただいてもおもしろいと思う。また、立派な港があるので、東京に売り込むより、中国に売り込む方がずっと早いと思う。中国では安いものしか買わないのではないかと思われているかもしれないが、日本産、メイドインジャパンなら安全だという意識が働く。東京に売り込むより、香港や上海なら、どこも出ていないし、それに加えて、高知大の交換留学生なども使って広めるという手もあるであろうし、姉妹都市を結ぶ手もあるであろうと思うので、高知県全体でバックアップしていけばよいのではないかと思います。

もう一つ大きく心配していることは、ものすごく独身の男女が多い。フジグラン野市で、パートやアルバイトの人が300人くらいいる。出会いの場を増やすために、年に1回コンをやっている。そういう場をつくっていかねばいけないと思う。流通業は、夜の時間が長く、22時くらいまで営業している。流通業の主力である女性がデートをしようと思っても、男性は土日が休みで、土日は彼女たちが一番忙しいときなので、ますます出会いの場がない。そんなことを考えると、高知県では、21時、あるいは20時で営業をストップしてもよいのではないかと思います。また、私が問題だと思っているのは、21時から21時半ごろにお子さんを連れて来る親がいるが、子どもはもう眠くなっている。早寝早起きということを習慣づけるためにも、営業時間について、行政からの指導をしていくことも考えていただいたらどうかなと思う。

最後に、土佐山田と、阿佐線ののいち駅と、空港を結ぶバスを通してくれたらとよくお客さんに言われる。高知市内向きは空港からの便が結構あるが、東向きのアクセスが悪い。のいち駅で降りて、少し時間があれば、たくさん店舗もあって滞留できるので、香南市として売上げが上がると思う。

知事：土佐山田、阿佐線、空港バスのお話は、バス会社さんが決められる話なので、私が今お答えすることはできないが、先ほど申し上げた2次交通の話のとおり、どうすれば観光客の皆様にご各観光地に行っていただけるかを考えないといけない。そのときに、交通をどうするかということを考えなければいけないという議論をしている。

独身が多いという話であるが、人口が少なくなって、出会う確率が少なくなっている、出会いの場が少ないというお話をたくさん伺っている。少子化対策として、いわゆる出会いのきっかけづくりをどうするかということが一つのポイントかなと思っている。市町村でもやっておられるところがあるし、高知市内で大規模にやったらどうかというご提案もいただいている。昔はこういうことに行政が入っていくのは感心しないと言われたかもしれないが、少子化対策の本旨はまず出会うことではないかというご意見も出ているので、これは真面目に考えている。

東京に売るより中国にというお話については、先々はそういうことを目指す方向だと思う。日本全体をみると、国内ではだめなので、デパートなども統合を繰り返している状況である。農産品も含め、いかに輸出していくかということ、今やっていると思う。私どもも、先々を

見越してそれをやらないといけないということで、この間、INAPという港の会議がフィリピンであったが、港湾の行政関係者だけで話をしてももったいないということで、経済ミッションも伴って行って、実際に、ユズ製品の売り込みといったこともうまくいきそうだなという状況になってきている。ただ、為替の問題もあって、リスクが大きいのもまた確かである。次の次に目指すべきものとして、輸出についても考えていく必要があるが、まずは、県内にこれだけ攻め込まれているという現状があるので、県外に出て行く発想が必要だと思う。

加工には高知の産物は向かないという話だが、それはケースバイケースで、品目によると思う。なので、向くものは何なのかということを考えないといけない。ユズの場合は、そもそも搾るものだったので、割と加工というものに目が向きやすかったのかもしれない。実際には、ミョウガを漬物にして売ったら価値が5倍になるという話もあったりするので、物によって、どういう加工の仕方をすればいいかということの研究をしてみる必要があると思う。さらに、その売り先、売り方についても、全国で唯一なので来て食べていただくというものもあるであろうと思うし、地域でまず売るといってもあると思うが、生産年齢人口は、これから確実に当面減っていくので、10年、20年経ったときのことを考えたときには、県外からお金を稼ぐということも考える必要があると思う。そのためにどういうものが作れるかということ、外の目を入れて、考えていくということが重要ではないかと思う。生鮮は確かに高知がおいしいと思うが、この間東京のスーパーの生鮮食品のコーナーに行ったら、高知のものはほとんどなかった。ほとんどが、千葉県産、茨城県産、長野県産、静岡県産で占められていて、技術は高知の方が高いかもしれないが、首都圏に近いという有利性を活かして、生鮮食品を売っている。昔はあそこに高知のものがたくさん並んでいたはずである。生鮮勝負だけでは食い込めないマーケットができつつある。それについて、次の一手をどう打つのかということを考え始めなければいけないのではないかと考えている。すべての品目を全部東京に売るといってではなく、品目にもよるし、地域でまず売るといっても当然あると思う。

(会場の方からのご意見等)

【高知の物差しでの発信、古民家の活用】

Jさん：私は建築業をやっている。昭和48年に設計事務所を開設して、高知県の活性化に向けての知事の姿勢、地元の良さを全国にアピールしていこうという思いに賛同している。都会の物差しで高知を計るというような形ではなく、知事の言われるように、高知、田舎の物差しで都会に発信をしていくという所信を是非とも貫いていただきたい。ともすると都会の真似をしたがるが、経済力からいって、いくら頑張っても追いつかない。都会にないが、高知に豊富にあるものがたくさんある。先ほどの意見でも出ていたが、それぞれの地域に、本当に地域のことを考えて、アイデアを持って、活かそうという人がたくさんいる。私もいろいろな人を知っている。ただ、残念なことに、そういうアイデアが結びついていない。行政には一生懸命やってくれている方もいるが、もっと協力してもらいたい。お金がなければ頭を使って、頭がなければ体を使ってでも協力してもらいたい。そうすれば、住民が大きな頼りがいを得られると思う。

次に、今、南海地震が発生すれば、瞬間的に崩れる家が6万、7万、あるいは13万戸くらい存在するという数字が出ている。平成15年の空き家率は、隣の愛媛県では、全国で5番目で、14.5%ということである。高知県はさらに空き家率が高く、平成20年では、20%近いのではな

いかと推測される。これは、非常に大変なことで、空き家でそのままほったらかしにされている家がかなりあるということである。先ほど、文化・伝統という話が出ていたが、空き家になった家でも、当時の職人さんの技が随所に光っている家がある。30、40年前のものから、古いものでは120年前のものもある。本当に見事な家もあるが、こういうすごい文化が、古くなったということで、簡単に解体されていってしまっている。高知県の文化・伝統の大きな損失だと思う。これを活かすため、県の支援（経営革新企業の認定）もいただいて古民家再生事業をやらせていただいている。耐震補強をして、リフォームをして、新築にはない良さを出して、土地付きで1千万円前後で販売をするという形で去年からやっている。仕事をリタイアされて景色のいいところで田舎暮らしをしたいという方、別荘代わりにしたいという方、アパート住まいで家をあきらめておられた方、家が古くなった方などが、それを購入している。そういうものを活かすことによって、新たなまちづくりができるのではないかと。また、地元の大工さん、左官さんの仕事につながっていくのではないかと。こういうものにも目を向けていただきたい。

知事：最初のお話について、高知は、都会の真似をしてもだめなので、高知のモデルでいかないといけないと思う。ないものねだりをしてもいけない。自ら持っている強みをいかに光り輝かせるかということだと思う。月のように、太陽があって初めて光るのではなくて、自分が持っているものでもって、自ら光るということを目指す必要があると思っている。ちなみに、お金がなければ知恵を出す、知恵がなければ体を使うというのは、おっしゃるとおりだと思う。私も、お金がなければ知恵を出すという話をずっと職員にしてきたが、知恵がなければ体を使うという話は確かにそのとおりであると思う。

古民家再生事業については、恥ずかしながら存じ上げなかったが、IターンやUターン、そして、観光資源などで使えるものも出てくるかもしれない。今のお話を受け止めて、よく意義を勉強したいと思う。

（知事のまとめ）

皆様、長い時間お付き合いをいただいて本当にありがとうございました。本日は、日ごろのご活動に基づいた、非常に詰まったご意見をいろいろ賜ったと思う。産業振興計画についてもいろいろとご意見を賜り、より多角的な視点から考えられるようになったのかなと思っている。この計画が、地域地域で具体的に実践されてこそ、県勢が浮揚していくのだと思う。1個2個の成功事例で県全体が良くなるということではなく、それぞれの地域でいろいろな取り組みが実際に行われてこそであると思っている。

伺ったご意見を決して聞きっぱなしにしないということで、皆様方に今日いただいたご意見は、プライバシーに配慮して記録を作り、関係部局にも回付して、組織としてこの情報を共有し、県行政を進めていく上での糧、土台とさせていただきたいと思う。

県勢の浮揚を図っていくために、県庁は一生懸命汗をかくが、経済については、民間の方々が主役である。民間の皆様方とともに、我々も力を合わせて、県勢の浮揚に取り組みたいと思っている。